

明治三〇年代における立身出世論考

— 『成功』を中心に —

傅 澤 玲

はじめに

一つの社会の発展はその社会を構成する諸成員の能動的な向上意欲と関わっている。また、所属する社会の構造はその向上の意欲に制限を与える。大雑把に言えば、一つの社会が開放的であるか、もしくは、閉鎖的であるか、という判断を下すには、人の向上欲を満たす程度から見る事が出来る。開放的な社会では比較的上昇移動がなめらかなに行なわれ、人々の向上のエネルギーを開放し、吸収することが出来る。このため、社会は目覚ましく発展していく。例えば、香港は一九六〇年代以降に急速な経済成長を遂げた。しかし世界規模の金融センターや雲端まで聳えている銀行ビル群、ホテル群、住宅群の建設。また人々が容易に外国へ旅行したり、親戚を訪

れたり出来るといったような、生活の様々なレベルでの豊かさを感じたのはこの一五年前ぐらいからである。これは、九七年の返還を一つの区切りとして、香港人が競って富を求めた結果として生じた現象である。一方、香港は自由放任の政策が施された、自由で開放的な社会という側面がある。誰でも貧困から身を起すことが出来、またその事実が社会的に奨励され、認められる。このように、限られている時間の間に蓄財し、それによって九七年以降の生活保障を用意するという香港人の考えと香港社会の開放性こそ、香港に空前の繁栄をもたらしたと断言できると思われる。

ところで、ペリーの黒船が江戸湾に到着したときまで、日本は東アジアの片隅で泰平の眠りをむさぼっていた島国にすぎなかった。しかし、明治維新後の半世紀の内に、日本は一

瀧千里の勢いで、ほぼ近代国家の形を整えた。この急速な近代化を生み出したものは何だったのだろうか。西欧近代の主導的精神がプロテスタンティズムにあったということは、よく言われている。それは、西ヨーロッパ及びアメリカにおける資本主義社会を創出した人々を内面から駆り立て方向づけていく主体的な推進力を用意した。では、日本の近代精神を用意したのは何であろうか。おそらく、このような問題に答えを与えるには様々な要因が上げられるかもしれないが、見田宗介のように、明治以来の急速な近代化の過程において、内面的、主体的な原動力を用意したのは日本人の立身出世主義であったと考える学者は少なくない。(見田宗介 一九七一年) 曰井吉見も同様な見解を示している。「立身出世は国民教育の目標であり、新しい道徳そのものでさえあった。：日本の近代化を考えようとする場合、立身出世問題をさけてすますわけにはいかない。」(曰井吉見 一九五九年 四二一頁)

近代国家建設の過程において、重要なことは現実を担う諸個人の体制への参加があったこと、そして体制側が諸個人のエネルギーを開発・吸収していったことだと思われる。このような体制側の倫理と個人側の倫理が一致した時、初めて社会秩序が保たれ、社会が繁栄していくのである。

明治国家の近代化における原動力の一つとなった立身出世が事実を伴った一つの明確な内実を有するようになったのは

明治維新以後のことである。それより前の、江戸時代における出世は、身分による違いはいうまでもないが、概ね、致富を意味していたようだ。それが明治の文明開化によって人々の立身出世に対する欲求が一気に噴出した。四民平等が発せられ、版籍奉還、廢藩置県などにより、居住の自由、職業選択の自由も法的に保障される。また社会的上昇移動も活発に行なわれた。そして、下級武士が一躍政府の高官となり、無一文から身を起こし大資産をなしたという事実が実名を伴って宣伝される。明治三年スマイルズの『自助論』が『西国立志編』として刊行され、明治五年福澤諭吉は『学問のすすめ』を世に送った。これらは、砂地に水が吸いこまれるように、全国の間々にまで浸透する。『学問のすすめ』は明治一〇年までにすでに六〇万部を売り(門脇厚司 一九七六年 八頁)、『西国立志編』は印刷が間に合わないほどの売れ行きであったという。

『西国立志編』と『学問のすすめ』が刊行され、圧倒的な支持を受けて読まれつづけた明治の前半期(明治一五年頃まで)は、立身出世の倫理が称揚され、称揚された倫理を実現することによって「出世」が現実になるという時代であり、またこうした個人の立身出世がそのまま国家レベルの立身出世(富国強兵・列強への仲間入り)と重なるという、いわば「立身出世の至福期」であった。(門脇厚司 前掲書 九頁)

明治政府は国家と民衆との間のコミュニケーションのパイプとしての官僚制を創出した。また、資本主義の発展と国際社会への適応の必要から、産業や軍事の領域においても近代的な組織が成長してきた。これらの新しい組織を運営していくためには、支配層に多数の人員を吸収する必要がある。こうして、下層や中層から身を起し、階層のハシゴを上層まで登っていく道が開かれることになる。

しかし、学校系列の整備（帝国大学入）、それを基盤とする人材登用の制度（文官試験及び見習規則）の確立に伴い、立身出世の閉塞状況は意外に早く到来する。我が身の自立を意味した「立身」は、即製の官職を登りつめてゆく、「出世」に転じていく。

一方、立身出世への情熱によって生じた上昇移動志望者の増大は上昇市場（成功できる機会）を逼迫させた。『西国立志編』や『学問のすすめ』に煽られた立身出世主義の神話は底辺一般庶民まで浸透する一方で、維持するが困難になったのが明治三〇年代からである。

このような状況においては、目標（立身出世）が過度に強調されると、手段の側面で逸脱行動が生じやすい。そして、噴出する上昇欲求を満たさなければ、社会の秩序の底に鬱積されて欲求不満が生ずる。普遍的な「立身出世」の機会への信仰によって開発された民衆のエネルギ―は沈滞し私生活に内

攻して「国家の元気」の衰退となるか、もしくはは体制秩序を破壊していくか、いずれかの結果をひきおこさざるをえない。例えば、日露戦争後に現われる「煩悶」、社会主義の蔓延（明治三四年における社会民主党の結成、明治三六年における平民社の成立など）などがそれである。それゆえ、体制側は秩序とエネルギ―を両立させる方途を見いださねばならなかった。

明治近代化を成し遂げたのは、まさしく、庶民の肥大した成功意欲を保ち続けさせることと深く関わり、私は思う。つまり、立身出世主義という文化的目標がそのつど巧みに変化し、維持され、社会建設、秩序の安定、国家の興隆に役に立つ推進力となったのである。

立身出世はすでに多くの社会学者、教育学者によって研究された。しかし、これらの論文は立身出世の社会的機能や意味を扱い、それをマクロの視点からアプローチするものが多かったように思われる。従来の研究は明治社会における立身出世主義の普及や意味変遷を示す全体像を広げてくれたが、具体的な事柄、例えば、オピニオン・リーダーの言論と読者の反応などについての分析があまり見られなかった。

この論文の狙いは、こういった研究の不足を補充し、当時の世論指導者側の考え（この論文では主にこれから取り上げる雑誌の編集者の考えを指す）と読者の反応を考察すること

によって、立身出世熱への対応を明らかにすることにある。分析の素材として、その時期の人気雑誌『成功』を取り上げる。この雑誌は一九〇二年創刊で、一九一六年廃刊となった（雨田英一 一九八六年一頁）。『成功』は修養欄、受験欄、海外活動欄、を設けており、立身出世神話の修復の時代（明治三〇年代）に適應しながら、立身出世主義の神話を学歴や海外雄飛で再現しようとした。その中に現われる言論は立身出世神話の維持を理解する上で役に立つだろうと思われる。

一 雑誌『成功』について

まず、雑誌『成功』について、その概略を説明しておきたい。

『成功』は村上濁浪（俊蔵）によって刊行された。石井研室によれば、彼は生地静岡岡県から一八九九年に上京し松島剛の『学窓余談』の編集の手伝いをしていた（石井研室一九七九年一二八三頁）。その頃、アメリカ人オリソン・マーデンの雑誌『サクセス』（“Success” 1897-1911）を読んで感銘を受け、雑誌『成功』を創刊した。（“Success” August 1904）村上濁浪に関しては上述した以上の資料は残っていないようだが、彼が明らかにマーデンの『サクセス』からヒントを得て、雑誌『成功』を創ったと言えるだろう。例えば、『成功』の英語欄には、「サクセス」の記事、もしくはマーデンの文章がしばしば載って

いるし、マーデンに関する記事も掲載されている。実際、両社は友好的で親密な関係を持っていた。例えば、一九〇四年の八月号の『サクセス』は二ページにわたって『成功』に関する記事を載せた。また一方、『サクセス』の記者ホルムスは中国を取材する途中、日本に立ち寄り、『成功』雑誌社を訪れたということもあった（『成功』九巻一号）。ちなみに、マーデンという人は成功読本の作家で、アメリカだけでなく、日本でもよく知られた人だった。彼の伝記によると、彼の著書“Pushing to the Front”は日本では、大ベストセラーとなり、百万冊近く売られたという（Margaret Connolly 1952 p.206）。この数字は確認できないが、それが学校の教科書として使われ（例えば、夏目漱石の『坊っちゃん』はこの事に言及している）、雑誌『英語世界』にもしばしば掲載されたことで、ミリオン・セラーとはいえないまでも、かなり読まれたことは推測できる。

次に、『成功』の読者と寄稿者について述べてみたい。

『成功』は主にどういう人達によって読まれたのか。「苦学生」の同情者を以て任じ、其精神に激励を與へんを期す」という発刊の主旨の項目からも窺えるように、『成功』の読者は主に東京に遊学するか、もしくは何らかの形で働きながら勉強しようとする青年であったことは、「記者と読者」欄の質問からも推測される。「愛読生」、「慾張生」、「苦悶生」、「苦学生」、

「渡航熱心生」などの署名も常に現われる。「記者と読者」欄を見るかぎり、この雑誌の読者層が男性によって構成されていたこともわかる。「一九〇六年の『滑稽新聞』(一四三号)には、「新聞雑誌の愛読者」と題して、『成功』は「貧書生」が愛読者だとする戯画を載せている。また、『成功』の編集者側は「…近来に至り学習院の学生間には殆ど本紙を手にせざる者無く、又各府縣よりは修身科の材料にとて續々申込あるに至れり…」(『内外叢報』『成功』二卷三号)と書いている。このように『成功』の読者は「貧書生」と呼ばれる、主に都市に居住して、苦学する学生を主な読者層として有していたことがわかる。またその他に、「記者と読者」欄の中では、上京するか、または海外で実業に携わることを志望する寒村の青年がしばしば登場している。このことから、『成功』はかなりの数の田舎の青年にも読まれていたと思われる。現に、姫路市から北一里ほど離れている農村で生まれた和辻哲郎は『成功』という雑誌は田舎の町でさえも相当の数が売られ、「その雑誌のことを二人で(友達と——筆者)話題にしたことはある(和辻哲郎 一九九〇年 三一五頁)」。『成功』の定価は創刊号から一五巻二号まで一〇銭で、後一五銭まで値上がったが。当時、この値段が一・五個分の煙草のそれに等しいもので、「苦学生」や「貧書生」には手ごろだったのかもしれない。

このような、青少年に立志努力勤勉の精神を養わせること

を目的とした『成功』は当時政界、教育界の名士をはじめ、文壇名士、軍人、実業家など幅広い寄稿者を得た。このため、様々な分野に関する文章が掲載されている。これらの文章は当時の世論の動向や各界の指導的な地位にいる人達の考えを知るには有力な参考となると思う。ただし、一部の文章は『成功』の記者によって執筆されており、それらの文末には、「記者文責」という注が載っている。だから、一部のものについては、厳密には「寄稿」とは言えないが、いわゆる「寄稿者」の監修を経ていると推測されるため、多少の言葉づかいや表現上の相違があったとしても、「寄稿者」当人の考えを代弁していると考えてよいだろう。

最後に、『成功』の発行部数について、言及しておきたい。正確な発行の部数は分からないが、『成功』は第二巻第二号において、本邦の青年雑誌中、「発売部数何地に於いても第一位と占むるに至れり」と豪語し、二年後には読者数一万五千人、五年後には「発行部数東洋第一」と自称している(竹内洋 一九八一年 一一二頁)。

当時『成功』雑誌社に勤めた人によれば、『成功』が創刊された当時、仕事場は村上濁浪の家にあった(石井研堂 前掲書 一二八三頁)。しかし、僅か一年の内に、自社のオフィスを持つようになったこと(『本社移転広告』『成功』二巻五号)から、『成功』の発行部数は「東洋第一」は言い過ぎにし

ても、その伸び率は、確かに「東洋第一」だったかもしれない、売れ行きも順調だったことは想像に難くない。

二 煩悶と修養

日清戦争とそれに続く臥薪嘗胆の時代は、国家意識の昂揚と資本主義の急速な発展が目覚ましかつた。しかし、その反面、それは人々の生活レベルでの格差を広げていた。例えば、農民の場合、不景気が訪れば、中小農民の生活は苦しくなり、自作農から小作農に転落したり、都市に貧民として流れこむなど、没落するものも少なくなかった。島田三郎が社長をしていた毎日新聞の記者であった横山源之助は当時の労働者の実態を調査し、次のように記している。

「二八年及び二九年頃は世の中は戦勝の為に景気よく、彼の地方も此の地方も、自から人氣は活発にてありければ、労働社会も頗る景気よかりしが：二九年後半期頃よりそろそろ挫折しはじめ、恐慌の声は切りに呼ばれ、職工払底の声喧しかりし紡績職工の如きさえ、却って失業者を出だし、事業界の不振につれて、今や労働社会も頗る不振の地に就きたり。」（横山源之助 一九五四年）

このように、初期の資本主義社会の歪みが社会全般を直撃

しつつあった。そして日露戦争が終わる頃になると、この傾向はさらに深まっていく。日露戦争は日本が白人国を負かし、列強への仲間入りを果たしたという意味で、国民にある種の自負心を持たせたことは確かである。しかし、日清戦争時のように、多額の賠償金を得ることも出来ず、一部の領土と鉄道、朝鮮半島への権益を確保するに止まったため、大きな不満が残った。加えて、この戦争で国力がかなり疲弊したため、戦争の勝利とは裏はらに国民の気分は一種の無力感に支配された。この風潮は生活難、就職難とあいまって、個人主義的風潮の強まりや、社会主義思想の広がりといったような形で顕在化してゆく。こうした時代状況の中で、「煩悶」という言葉が流行するようになっていった。

岩波茂雄（一八八一—一九四六年）は、当時の様子をこう述べている。「その頃は憂国の志士を以て任ずる書生が『乃公出ですんば蒼生をいかんせん』といったやうな慷慨悲憤の時代の後をうけて人生とは何ぞや、我は何処より来りて何処へ行く、といふやうなことを問題とする内観的煩悶時代でもあった。立身出世、功名富貴が如き言葉は男子として口にするを恥ぢ、永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭はずといふ時代であった。」（安部能成 一九五七年六一頁）

煩悶の現象は自我の自覚に裏打ちされた個人主義的傾向で

あり、立身出世という文化的目標の圧力の結果であらう。これを簡単に解釈すれば、「身を立て」、「名を上げ」などの出世観に駆り立てられ、一所懸命、上に進もうとする時、現実の社会には、いわば、上に達する手段が欠けているため、戸惑い不安に駆られ、苛立ち、それが内攻するのである。これのために立身出世、功名富貴の追求をさっさとあきらめ、現実を楽しむ「遊民」となった者も少なくなかった。

石川啄木の「時代閉塞の現状」（明治四三年八月）という評論では次のように指摘している。

「日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其数を増やしつつある。今やどんな癡村へ行っても、三人か五人の中卒業者がいる。さうして彼等の事業は、実に、父兄の財産を食い滅す事と、無駄話をする事だけである。我々青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力は普く国内に行亘ってゐる。現代社会組織は其隅々まで発達している。」（石川啄木 一九八〇年 二六八頁）

煩悶やそれを生み出す「遊民」の出現は立身出世の神話を危うくするもので、これにどう対応するのかが、成功を唱える指導者の課題であった。『成功』の編集主幹村上瀧浪はこのような「遊民」を批判している。

「最も憂ふべきは、今日の上流、中流社会に、座食の徒の多

いことである。都会でも、地方でも、中産以上の資産を有し、衣食に差支への無い者は、大抵遊んで居る、彼等は財産もあり、地位もあり、学問も多少は為て、何事でも出来る身分なるにかかはらず、只安閑として毎日、配達の新聞、新刊の小説位を読んで遊んで居るのである。彼等は人間と生まれた甲斐もなく、彼らに美麗なる衣服を着、芝居でも見物する位を無上の事業と心得、憐れにも此世を終るのである。」

〔喜憂録〕『成功』一巻一号）

このような煩悶の結果としての社会からの逸脱者である「遊民」はおそらく『成功』の読者には少ないと思われる。上述したとおり、『成功』の読者の多くは都市の苦学生か田舎の青年連であるから、遊民になれるほど、経済的余裕もなかっただろう、また彼らの理想もそういう選択を採ることを拒んだはずである。しかし彼らにも彼らなりの煩悶がある。『成功』の「記者と読者」欄に、「煩悶生」と署名した相談がしばしば現われた。彼らが抱える煩悶は、学資がないため、自らの志を立てることができない、あるいは働きながら、勉強しようと思うが、体質が弱いので、目的を貫徹することができず、煩悶懊悩しているというような問題で、能動的に自身の目的をコントロールすることができないという悩みと苛立ちである。

『成功』は「自助的人物」、「剛毅なる人物」の養成を目的

とするから、煩悶を退治せねば、雑誌自身の存在も問われかねない。『成功』はこれらの対応策として、「煩悶は如何にして慰藉すべき乎」、「青年は如何にして煩悶を忘却すべき乎」、「煩悶除却の唯一方法」などの記事を大量に載せた。そして、処世の思考法、人生問題思考法、経営思考法、精神力集中法などの記事を掲載して、成功をもつば個人の修養と努力によるものとした。ここで、そうした文章から一文を引いてみよう。

「煩悶なる語近来の流行語と為って以来之に關する除却方法と稱する者は頗る多し、然れども余は茲に煩悶除却の唯一方法を示さん、其事何ぞや、曰く『只正を履んで恐るる勿れ』と云へる一語是なり、苛も己にして正ならんか、煩悶何ぞ我を煩はすの余地あらんや、己にして天に恥ぢず、地に恥ぢざる底の大正義を有せんか、何ぞ煩悶を爲すの必要あらんや」

〔成功〕九卷(八号)

この引用から分かるように、『成功』の投稿者は成功と個人の修養との相関を強調したから、出世については当然その原因を人格や品性などの道德的価値に求める。成功とは、「善良なる目的に向ひ己れの最良を竭し、それを完ふするにあり」なのである。(『成功哲学』『成功』八卷(八号)『成功』の修養思

想は世俗的な名譽や権力や富などを得なくても、人格がすぐれれば、立派であるという点を強調した。こうした思想は成功の目標を曖昧化して、立身出世に向ける情熱を維持する効果がある。また、社会秩序の安定を保つ役割も担っていると考えられる。というのは、成功はもつば個人の資質と努力によるとされるので、失敗したとしても、個人に原因を求めべきで、社会システムの欠陥を問題視しないからだ。

だが、『成功』の代表的読者層である貧書生が求める、もしくは悩んでいるのはこうした精神的な成功の達成ではないのではなからうか。むしろ、職業を得るために無くてはならないパスポート——學歷を獲得することが彼らの最も関心とするところであつたらう。次の相談又は彼らの本心の希望と悩みを表すものだと思われる。

「余は性神經質なるが将来工業界に於て身を立てんとす電気機械科と採礦科とはどちらが其性に適するや」

(記者と読者)九卷(三号)

「余は目下小学教員を拜命然し余の性来と目下の教員とは相似ず到底成功覚束なし殊に物価の高き當今生活難に絶す余は中学校を卒業せり何か着実にして勤勉ならんには學歷其他を餘り用せず着々昇進する道なきものにや余は事務を執

る方を好む。鉄道員となりての奉給は如何程度に候やまだ
鉄道員として上級の係員となるに必要な條件如何に候や。」

〔記者と読者〕一三卷二号

『成功』はこのような問い掛けに対してどんな答えを用意
したのであるうか。

三 苦学——学歴の取得

「金箔の光ある時代は既に去って、今や漸く実力競争の世
と為らんとす、今後修学の方針如何と問ふものあらば、余輩
は遠慮なく、『足下真正の実力を養へ』と答へんとす。」（金
箔の世はされり）『成功』三卷二号）これは、村上濁浪が自信
欄で警告しているものである。

明治三〇年代の後半になると、諸体制、組織の建設はほぼ
出来上がり、それに就ける人の位置づけが確立してきた。こ
れは、一面で出世はもはや僥倖ではなく、規定されているルー
トに従わなければならないことを意味している。学校
＝学歴間の序列が人々の目を引き、人々に意識されはじめた。
「その序列を浮かび上がらせる背景としての役割を果たしたの
は、職業や組織の世界と学歴との、構造的な結びつきの形成
であった」（天野郁夫 一九九四年 一三四頁）。出身校と就
職できる職種は密接な関連を有するようになり、いわば学歴

社会が成立しはじめたのである。つまり、義務教育だけでは
駄目で、さらに高い学歴、出来ることなら大学や専門学校卒
業の学歴を手に入れることが必要な時代がやってきたのだ。櫻
井役の『中学校教育史考』によると、このような時代背景の
もとで、中学卒業生の数は明治三〇年前後に急増した。中学
校卒業者の進路については、卒業者の増加に伴い高等学校は
勿論のこと、専門学校への進学者も増加した。こうした現象
は、新しい職業に必要な専門的知識を求める志向を示してい
る。実業界にも大卒の出身者が次第に進出するようになった。
特に成熟した財閥企業は学校出を積極的に採用し、こういう
人達が上位の経営者層を占める比率が高くなるのはこの頃に
始まると言われる（青沼吉松 一九六五年 一一三頁）。こう
いうことから教育による出世が社会的に奨励されたことは
その証左とみてよい。

このような現実に対処する手段として、苦学生やもしくは
その予備軍を讀者とする『成功』は勉強による出世を積極的
にすすめた。例えば、ある新年特集は「明治名士貧困時代」と
いうテーマを扱った。その中では、名士達が如何に貧困時代
を克服したかを紹介しながら現代の青年を奮起させようとし
る。『成功』が賛美する成功人物は艱難に敗けず、勤勉努力す
る人達である。そして、勉強は成功のための資本であるとき
れたので、学歴、職業資格を得ることが成功への不可欠なパ

スポーツであるとする。『成功』はこのような観点から、それらを獲得するための具体的な方法と技術を提供しようとした。試みた。

『成功』は早々日本力行会（一九〇二年島貫兵太夫によってつくられた、苦学生を援助する組織）を紹介し、「苦学法としての牛乳配達」、「苦学法としての新聞配達」、「苦学法としての砲兵工場職工」などの記事を掲載した。さらに九卷三号からは受験欄を設立し、「判検事試験、弁護士試験、外交官試験、文部省試験、各高等学校及び各種類の学校の試験に関する記事」を号を逐い掲載する。また、「記者と読者」欄に、質問ごとに分けて、成功の助言、海外欄の他に、学校、受験、独学に関する件という項目をつくり、その中で、様々な学校情報、苦学の方法を提供する。例えば、夜間中学校の月謝はいくらか、それを稼ぐにはどんなアルバイトをすればよいのか、また、新聞配達、牛乳配達の勤務時間と給料の如何などを極めて細かく説明している。さらには誌面を割いて、受験に関する記事を載せるだけでなく、別冊の受験書などのような書物も出版した。

ところで、当時の最も経済的な勉学法はどんなものだったのだろうか、次に生活内訳の一例を紹介してみたい。

「普通の下宿生活をする事にすれば、間代は一畳五拾銭で四畳半の室ならば二円五拾銭、加えに食費が六円、炭、油等

の拂が約一円五拾銭は要る、是で下宿屋に拂ふものばかりが十円となる、月謝や諸雑費を加算すれば如何しても拾四円餘は要るのである。」（『東京最低額勉学法』『成功』九卷六号）当時の新聞配達は朝の四時頃より始まり、八、九時に終わる。そして一週間に一度、午後二時頃から午前八、九時頃まで働かなければならない。月給は初め八円ぐらいだったという。（『記者と読者』『成功』一五卷三号）

これを見ると、この新聞配達の入と時間では最低限度の勉学すら続けることが難しい。現実にはこんな苛酷なアルバイトをして、果たして何人の苦学生が成功し得たのだろうか。「苦学生の目的を以て上京する青年年々数百の上に出づるが、能く最初の目的を貫徹して故郷に錦を飾るもの僅かに十分の一、其他は中途に挫折してあらぬ方向に走るものが多い。」（『苦学生最初の注意點』『成功』二九卷四号）こういう事実を、苦学をすすめるオビニオン・リーダーたちも認めざるを得ない。苦学は勉強による立身を動機にしているが、それに耐えきれない者は学歴のコースからはずれ、墮落するのだ。

このような現実を前にして、立身出世への意欲を持続させ、鼓舞するため、『成功』は柔軟な政策をとった。いや、とらざるをえなかった。つまり、受験法、苦学の方法を提供する一方で、「記者と読者」欄に寄せてきた苦学を志す青年達に田舎に留まるようにと忠告するのである。例えば、次の応答はこ

のことを示している。読者は「貧生にて中学校に入學するの學資なし故に教科書を借り入れ勉強中なり、奮然東京に出で苦學致し度きが如何に成功し得べきや」と問う。それに対して記者は「猛りに猛つて早成を希ふは青年の通弊なり、東京に来ればとて腦力は俄然数倍の働の出来得可き筈もなし、而して誘惑と窮困とは田舎の幾倍を加ふ、是時に當り當途もな孤客何を頼りに成功を期せんとするか。若かず其家郷に在りて従來の方法を続け少くも中学卒業以上の學力を蓄へ然る後除了に出京の計を為せ。」

成功するには學歴が必要となつた。しかし、その學歴を手に入れるためには充分な勉強時間と經濟的な裏付けが必要である。苦學生に突き付けられた、この大きな問題は同時に『成功』にとつても解きたい難題となつた。

四 海外雄飛

明治22年、東京——神戸間の鐵道が開通した。こうした交通の便の向上の結果、田舎の青年はどんどん上京し、遊學熱が広がる（竹内洋 一九九一年 一三九頁）。明治一九年、福岡から上京した堺利彦はその当時の気持ちをごう叙懐している。「その頃、東京に『遊學』するのは、今日、ヨーロッパに『留學』するのと同じく、同じくらしい珍しさを感じたので、昂奮、緊張、歎息、勇躍、一七歳の少年は洋々たる前途の希望

に燃えた。」（堺利彦一九八二年 六三頁）しかし、都会に夢を託した青年のうち、何人が自分の願いをかなえたのだろうか。勿論彼らの中には、『三四郎』の小川三四郎、『青年』の小泉純一のような財産家、資産家の息子もいて、優雅な學生生活を送つた者もいるが、『成功』の相談欄に登場したような苦學生は野心や夢だけでは、目標（立身出世）に到達することが出来なかつた。教育という手段は成功への有用な手法だったが、經濟的な困難に悩まされる青年にとっては、一定の教育資格を獲得しにくかつた。加えて、明治の後半では、官學、私學、専門學校などの卒業生が増え、「教育過度」、「人材過多」といわれる状況になる。ある『成功』の記事はこのことを次のように記している。「近來就職難の聲が盛に起きて、政治家や學者が子の此の問題に就て頻に研究したが、遂に何等解決する處がなかつた。」（『各學校卒業生の需要』）（『成功』二五卷二号）

こうした状況は、苦學生にとっては、単に目標（成功）に達する手段の困難さのみならず、成功への機会が少なくなつたことも意味している。明治維新後の新体制の設立時は、上京して、遊學し顯官になることは努力次第で望みを達せられた。つまり機会があれば道は開けたし、また社会も人材を強く求めていたのである。しかし社会の成熟に伴つて、成功者の市場が狭くなつてくると、例え機会があつたとしても、そ

それが成功に結びつくとは限らなくなる。勿論それが容易であれば、「成功」論など唱える必要もないが……。ともあれ、このような状況においても、人々は夢を有していたし、また不遇であればある程、それに反比例して向上意欲は高まってゆくものである。『成功』の読者相談欄からはこうした切実な願望を読み取ることができる。

「小生は幼時父母に別れて祖父母に育てられ高等小学卒業後家業を手伝ひ今や相随人たり、齡一八、然れども伝来の家業は前途に望みなき故中学より進んで高等の学を修めんとを願へど許されず、因て断然意を決して出京し独学苦学力行して成業の後不孝の罪を詫びん孝に候間何卒方針御示し下され」
〔記者と読者〕『成功』九卷二号

田舎の家業を後にし、学問を修めて雄飛を計ろうという相談者の夢は想像に難くない。このような希望や野心に燃えている読者を抱える『成功』は、成功への機会が減少していくという現実に対して、その処方箋を海の彼方に求めた。それはつまり、海外の事業への誘導であり、更には海外移住の奨励といったような方策を強調することによって、その現実を乗り越え、立身出世アスピレーションの減退を防ごうとしたのである。

『成功』は「海外活動」、「実業」欄を設け、「朝鮮に於ける養蚕業」「西比利亜の海産業」、「最近樺太漁業実験談」、「満州有望農業生活」「赤手渡米成功方法」などのような記事を号毎に大量に掲載した。これらの文章の信頼性は実際どうだったのかここで検証することは難しいが、ビジネスの資料として見るならば、情報が豊富で、詳細であった。『成功』の人脈の広さと情報源の豊富さを感じさせるには充分である。例えば、海外欄の記事の執筆者の多くは実際海外で活躍している人達であった。その中には、南満州鉄道の総裁である後藤新平の文章もあった。また著名な社会主義者、片山潜の文章はしばしば海外活動欄に登場している。彼はアメリカで成功の道を切り開くことを強くすすめた。

「余は今我善良なる『成功』の読者に告げん。諸氏にして真の成功を欲せむか、すすんで渡米せよ、北米は実に成功し得るに極めて善き地なるなり、殊に資力なき青年にはよい邦なり、学問を欲せんか、北米の大学は諸君を歓迎せり、事業を為さんと欲するか、北米の天地は諸君に都ての機会を呈すべし」
〔渡米希望者に告ぐ〕『成功』二卷二号

片山潜は一八五九年に生まれ、二二歳の時、立身出世の夢を見て、上京した。彼は活版所の車廻しや文撰の小僧をしな

がら、勉強した。貧乏のため、立身の大事を遂げることができなかった。その後、渡米し、働きながら、いくつもの大学で学び、学位を取得する。だが、このように苦勞して、念願の学歴を手にしたのだが、社会的、また経済的に恵まれた成功者とは言いがたい。彼の伝記によると、日本に戻った後、安定した職業がなかった。(隅谷三喜男 一九六七年 三三〇―三五頁) これは、アメリカで取得した学歴が日本社会では通用しなかったからである。Kinmonth氏が指摘するように、正統的な学歴とは日本の大学教育を受けることであり、外国での教育はプラス・アルファでしかなかった。(Kinmonth 1981 p.193)このゆえに片山潜も日本社会の中では、生涯、不遇を託つこととなる。つまり、外国の学問は日本での職業にはつながらないのだ。余談だが、このような日本社会の狭さは片山潜を社会運動家、もしくは社会主義者に走らせる一因となったのかもしれない。

ところで、『成功』雑誌社は一九〇六年五月に『探険世界』、一九〇八年五月に、『植民世界』という二誌を刊行した。これらの刊行の趣旨は「本邦人の島國的根性を打破して、鋭氣凛々、本邦に世界的、大陸的、活動的の國民を造るに」とある。また、雑誌の出版と平行して、白瀬中尉が率いる南極探険隊の紀行を熱心に紹介し、社長村上瀧郎自身もこの探険隊に多大な財政的援助を与えた。このことは次のような大隈重信の談

話から窺える。「村上君も自分の業務を全て捨てたのではなからうか、然し此探険の為に殆ど之を犠牲にした観のあるのは真に氣の毒な次第である。」(「南極探険事業一年有半回顧談」『成功』一二二巻二号)

このように、『成功』が海外活動に力を入れるのは、あくまでも、上昇移動の場を広げ、立身出世の夢を見る庶民のエネルギーを海外の新天地に誘導しようとしたからに他ならない。「若し内地で職が得られぬと云ふならば、外国に向かってドシドシ進んでゆくべき」(『成功』三〇巻一号)

勿論、海外移住、植民に関する言論は『成功』の独創的なものではない。すでに明治二〇年代に人口過多を予見し、その対策として、海外移住をすすめる識者が少なくなかったという社会的背景があった。日本人の海外移住は、明治元年のハワイの入植に始まり、その後北米や中南米にも移民先に広がっていた。だが、このような移民は個人で行なう海外移住に過ぎなかった。ところが、日清戦争以降、日本の対外膨張の議論が頻りに起こり、今迄個人で行なう移民が、植民という国家的事業に格上げされることになった。そして、明治後期になると、単に人口過剰になるから国外に出よ、という消極論だけでなく、大隈重信が「日本民族膨張論」(明治四三年)において主張したように、積極的な海外発展策の一つとして移住も鼓吹されたのである。

『成功』はこのような思想的な潮流にのっとり、立身出世への情熱に方向性を与えたと言える。そして、目標に到達する場所の拡大を、自ら実験してみせることによって、その論拠を証明しようと試みた。こうした実験は国のレベルでの移住策と個人のレベルの海外雄飛の夢を一致させたように思われる。

むすび

明治三〇年代、体制建設が完成しつつある社会の中で、立身出世観は「煩悶」の蔓延、立身を夢見た田舎青年の上京熱、上昇移動市場の逼迫など幾多の難問にぶつかってきた。これは成功であれ、立身出世であれ、向上心を鼓舞しようとする社会や組織にとって、大きな課題であった。もしこれに対する対応策を打ち出すことが出来なければ、不満や逸脱者（遊民）が増え、社会構成員が今迄持っていた立身出世へのアスピレーションは切り下げられ、更には、怨みや欲求不満が堆積し、社会システムの欠陥さえも問題視されるに至ってしまうだろう。こうなると、個人の成長や、生活環境に影響を及ぼすというばかりでなく、社会秩序をも脅かす原因となる。それゆえ、立身出世への情熱の減退は個人にとっても、社会にとっても好ましくないということが考えられた。

雑誌『成功』も、このような問題を意識しつつ、論調を変

化させていった。

まず、「煩悶」を退治するため、修養思想が登場した。本来、立身出世は身を立て、名を上げるといふニュアンスが強かった。しかし、日清戦争後、拜金風潮が蔓延し、成功は致富や、ヒエラルキーの中の地位の達成であり、それを象徴するものとして、名譽・権力・富が置かれた。すなわち、立身出世は世俗的成功に近い意味を持ったのである。ところが、世俗的成功を獲得するためには、それを達成する手段が必要条件であり、これを十分に満たしていない者に世俗的成功を強調すると、必然的に緊張、不満等が生じ、ついには「煩悶」に悩まされ、最終的には目標を捨て、逃避者となる者も出てくる。したがって、立身出世という神話を持続させるためには、世俗的成功という目標を修正する必要が生じる。そこで、『成功』は精神的成功を新たな成功の価値観として導入したのである。すなわち、人格や品性などの道徳的価値が高ければ、例えば物質的成功に達しなくても、その人を成功者として評価しようとした。これは換言すれば、成功は個人の資質と努力によるものであり、例えば失敗したとしても、個人を取り巻く環境や条件、社会システムの如何を問わないということである。このように、修養思想は成功の物質的な比重を減らし、成功の手段が乏しい者、あるいは失敗者を慰め、不安を解消させる機能を持っている。このため、修養思想が社会秩序の維持に

一定の役割を果たしていたということが出来る。そして、それは社会の発展に不可分な民衆のエネルギーの衰退を防ぎ、持続させるという役目も担っていた。

しかし、ここにおいて、精神的なもののばかり強調すると、成功のシンボルが曖昧化され、その真実性が疑われてしまう結果となりかねない。特にその日その日の生活を営まなければならない人にとっては、個人の修養よりも、成功と呼べるほどではなくても、収入の安定している職業、もしくは、人並み以上の暮らしをもたらしてくれる職業に就くことの方が切実であり自然な願望であつたらう。では、このような望みを実現するためにはどうしたらいいのか。明治三〇年代は上昇移動のルーツや上昇移動の資格の制度化がはじまり、いわば、学歴社会が誕生する頃であつた。官僚機関は言うまでもないが、「主要な銀行、会社の管理職が学校出によつて占められるようになった」（竹内 洋 一九八八年 一七八頁）。こうした状況下では、教育は身を立てる財となり、学歴は職業、成功へのパスポートとなつた。『成功』は発刊から廢刊にいたるまで、勉強による出世を力説していた。受験欄をはじめ、学校案内や苦学などは常設欄として毎号掲載されてきた。このように『成功』が教育の重要性を繰り返し唱えた背景には、社会を支配している学歴社会の成立がある。学歴社会の功罪はここでは別の問題として詳説しないが、それは日本社会を特

徴づける最も重要な要因というばかりではなく、日本社会のヒエラルキーの定着、固定に最も重要な役割を果たしたと思われる。

ところで、『成功』は上述したような成功へのアプローチとは別に、上昇移動のフロンティアを拡大するため、海外への積極的な展開を試みようとした。このような主張は国内での成功市場の開拓が難しくなり、更に問題に対する解決が複雑になり始めた頃出てきたもので、国民の目を海外に逸らせるという意味で、安易な解決策ではあつた。しかし、国家の植民政策との兼ね合いや、海外での成功を望む人が多かつたため、単に個人の成功の希求に止まらず、後に、国家の政策に影響を及ぼすことにもなる。これらについては、今後、更に掘り下げて研究を深めてゆきたい。

人間は如何なる時代においても、出世したい、成功したいという欲望を持っている。しかし、成功の機会はそれに比例するようには、人間の欲望を満たすことはない。おそらくこの矛盾は人間の永遠の課題なのかもしれない。しかしこの課題が存在することこそ、社会の発展の推進力を促しているとも言える。人の住む社会や価値観が変わろうとも、この矛盾に對しての問題と、その解決策が平衡のとれる形で提起され、続けられる限り、社会の安定的な発展が見込めるのかもしれない。

【参考文献】

- 村上瀧浪 一九〇二—一九一六年『成功』成功雜誌社
見田宗介 一九七一年『日本人の心情と論理』筑摩書房
白井吉見 一九五九年『現代教養全集7』筑摩書房
門脇厚司 一九七六年『立身出世の社会学』『現代のエスプリ』一
八』門脇厚司編
雨田英一 一九八六年『村上俊藏の生いたちと思想形成』『研究室
記要』六月号東京大学教育学部研究史・教
育哲学研究室刊
石井研堂 一九七九年『明治文化全集別巻 明治事物起源』日本
評論社
Orison S. Marden Aug. 1904 "Success"
Margaret Connolly 1925 *The Life Story of Orison Swett Marden*. Thomas
Y. Crowell Co.
竹内 洋 一九八一年『日本人の出世観』学文社
和辻哲郎 一九九〇年『和辻哲郎全集 第十八巻』岩波書店
横山源之助 一九五四年『内地雑居後之日本』岩波書店
安部能成 一九五七年『岩波茂雄伝』岩波書店
石川啄木 一九八〇年『石川啄木全集第四巻』筑摩書房
天野郁夫 一九九四年『学歴の社会史』新潮選書

青沼吉松 一九六五年『日本の経営層——その出身と性格——』

日本経済新聞社

竹内 洋 一九九一年『立志・苦学・出世』講談社現代新書

堺 利彦 一九八二年『日本人の自伝 堺利彦 九』平凡社

隅谷三喜男 一九六七年『片山潜』東京大学出版会

Earl H. Kimmonth 1981 *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought*.

University of California Press

竹内 洋 一九八八年『選抜社会』リクルート